

## 科学革命トラブル

### 1. 発端

私、中野純子は花咲電機の本社で、社長室スタッフ業務に従事している。2月の2日に入社すると、社長から声がかかった。

「中野さん、研究所の方から、良い報告が上がってきた。若い研究者が、画期的な成果を出した。」

私は、社長がこのように喜んでるのは初めてだったので、もう少し聞くことにした。

「いったい、どのような研究ですか？」

社長は上機嫌で続けた。

「ある種の藻の細胞を突然変異させて、葉緑素を変化させ、光合成のかわりに水から水素を作り出すようにする方法を、基礎研究所の若手が見つけた。これを、イギリスのネイチャー・サイエンス誌に投稿し、採用されたという報告が、今届いた。」

私も、状況が判ってきた。しかしなぜ当社にそのような力があつたのか、疑問だったので質問した。

「しかし、そのような研究者が、なぜ当社に居たのです？」

社長は、苦笑して説明してくれた。

「実はこの件は、古野君から詳しく聞いてもらった方がよいが、文部科学省や厚生労働省からの内意を受け、博士課程修了者をメーカーで活用する方法を検討する、非公式検討の一環で採用した一人が、これを成功させた。当社は、燃料電池の開発を行っている、旗を掲げているので、植物的な水素生産と言う研究課題は、一応受け入れる余地があつた。その後、関連研究を行っているうちに、大当たりを引き当てた。」

私は、論文発表状況などが、少し気になって質問した。

「論文発表ですが、社内のセキュリティなどはどうなっています。また社内査読はできましたか。」

社長は少し醒めた顔になった。

「発表内容は、一応広報部が確認している。しかも分野が基礎研究であり、当社製品自体でなく、その燃料の研究だから、公開することのメリットが大きい。特許も一応取得するが、幅広い会社に使わせる戦略を考慮している。ただ学問的な内容の査読は、当社では難しいな。ただ、研究者の小方さんは、早慶大学で博士号も取っているし、研究の評価は自分でできるだろう。ましてやネイチャー・サイエンス誌の査読にも通っているので、問題はないと思う。この査読段階では、色々悶着があつたらしい。『生物学の歴史を愚弄している』とまで言われたらしい。」

私も少し安心した。

「確かに、水素供給が増えることは、燃料電池の普及と、研究開発の加速につながるでしょうね。燃料電池開発の旗を掲げた効果があるので、株価も上がりますね。但し、『生物学の歴史を愚弄する』とは、少しひどい言い方ですね。」

社長は、これには説明してくれた。

「この件に関しては、例の田中氏に少しアドヴァイスを貰っている。彼の意見では、『細胞が変化しないという前提で組み立てられている、生物学の土台を覆す、科学革命的

発見』だから、いい加減な証拠では、却下されるだろう、と言うことだった。それで苦労して、証拠を集めて何度も提出し直して、受理されるに至った。」

ここまで話している時、人事担当の古野常務が入って生きた。

「社長、今回は基礎研の小方さんの研究、上手く行きましたね。私も、採用責任者として嬉しいです。」

社長は、苦笑していった。

「それは、自分の目の高さの売り込みかな。さて、今日の午後1時からプレス発表を行う。彼女は見栄えが良いから、その点でも期待できるな。」

これを聞いて古野常務の顔が少し曇った。

「それは少し危険ですね。彼女は、知的能力は十分あるが、コミュニケーション能力では、かなり難があります。そのため、一人で仕事をする形で、リーダー職には就けないように配慮しています。研究予算などは、特別配慮しても、部下をつけることはさせていません。このような、コミュニケーション能力に、問題がある社員の活用実験的な要素あり、とすることで、厚生労働省の小寺企画官殿の内意を受けて、彼女を採用したのです。プレスとの対応は、上手くできるのでしょうか？」

社長は厳しく言った。

「そこをカバーするのが、広報部の仕事だ。」

実際プレス発表は、思いのほか上手く進んだ。いやできすぎたため、小方春子特別研究員は、マスメディアでもてはやされるようになった。この結果に、古野常務は苦笑していた。

### 2. 敵対行動の発生

あの報道から、2週間がたった。その間ネット上に、小方さんの中傷する書き込みが目立ってきた。私たちは、単なる書き込みと無視していたが、一部では論文の内容にまで踏み込む書き込みが出てきた。特に私たちが注目したのは、画像情報に変な加工の痕跡が見えたとの指摘であった。この後も、細胞の一般論的な解説的部分の記述が、海外の解説ホームページに酷似しているとの指摘があつた。

更に、悪いことに、小方さんの博士論文にも、引用の不備などが見つかり、ネット上の追求から、週刊誌の追求まで始まった。そこで、2月18日に、社長から、私と古野常務に指示が下つた。

「小方さんの件は、これ以上放置できない。但し、学会まで絡む事態なので、我々では解りかねる部分がある。至急田中和夫さんに連絡を取って、協力依頼してください。

守秘義務などもあるので、当社の特別嘱託での雇用手続きをしてください。」

古野常務は、なぜ田中氏と言う顔をしたが、社長の指示に従った。田中氏とはすぐに連絡が取れ、彼も事態を注視していたとのことであり、すぐに出社してくれた。そして、社長も入れて、4人で緊急会議を開いた。冒頭、社長から田中さんの紹介があつた。

「皆さんに、今回集まってもらったのは、今マスメディアなどをにぎわしている、小方論文問題です。当社OBの小方さんに、急遽嘱託としてお仕事を依頼した理由は二つあります。一つは、田中さんは当社OBですが、大学関係にも交流が広く、学会の論文審査などの状況も理解しているからです。当然当社OBとして、我々の立場も理解

した上での行動です。もう一つは、これは田中さんの口から説明いただきますが、彼は、このような科学哲学上の問題に関し、造詣が深いからです。」

ここまで社長は言って、田中さんの方を向いた。田中さんは、一礼しすぐに切り出した。「ただ今、ご紹介いただいた田中です。私が、造詣が深いというのは、少し買い被りですが、確かにこの事態は、私の学生時代の研究テーマで、ライフワークとして検討している、『フレーム問題』に当てはまります。関連して、科学哲学では、科学革命の現場における事件として、『旧来の科学者と新規科学者の対決』と見ることもできます。」

ここで、田中氏は一息置いた。古野常務の反応を見極めて、田中氏は続けた。「本件の本質は、『科学革命を実行した、実験の天才ではあるが、研究者としてはあまりにも幼すぎた、日本人研究者の悲劇』です。」

ここで彼は一区切りした。これに対して、古野常務が当然の突っ込みを入れた。「実験の天才というのは、あれだけのことをしたのだからよく解る。一方、幼稚と言うのは、論文の書き方がまずかったと言うことで、認めざるを得ません。しかしなぜ日本人なのですか？」

これに対して、田中氏は満足そうな笑みを浮かべ、続けた。「日本人には、『事実一つ』と言う信仰があるのです。そのため、『事実を示せばわかってもらえる』と言う行動になります。しかし、キリスト教などの世界では、『真実は神のみぞ知る』と言う世界なのです。そこで、『科学的なモノでも、観察状況ではいろいろな解釈がある』という見方をします。特に、革命的な結果には、本当に実験が正しかったか、疑いの目で観ます。今回の小方論文の査読過程では、旧文明の立場からの『疑いの目』の評価を、彼女が『判りやすさ不足』と誤解して、画像修正などに走ったのが、一つの理由ではないかと推察します。」

この話を聞いて、3人はどっと疲れが出た。社長が気を取り直して、質問した。「そこまで言われると、幼稚な研究者と言うのは当たっている。そこで対策はどうすべきだと思う。」

田中氏はきつい目で答えた。「まず謝罪すべきところは、きちんと謝罪すべきでしょう。しかし、一部週刊誌の報じているような、人格攻撃にはきちんと対応すべきです。それと、根本的な問題ですが、彼女の実験結果は、認める方向で動くべきだと思います。つまり、論文の書き方は不備があったので取り下げる、しかし実験結果の価値は疑っていないので、追尾データを今後とも集めて、再度報告する。このスタンスでいかがでしょう。」

社長が応じた。

「確かに、論文取り下げは仕方がないだろう。しかし最終防衛線として、実験結果は正しかったと主張する。このためにできることはあるかな。後もう一つ、彼女の学位論文の件はどうする。」

これに対して、田中氏は一つの答えを持っていた。「まず、学位論文に関しては、個人と大学との関係です。私の個人的意見では、彼女の学位論文中のコピペ部分は、一般理論の紹介的部分であり、学位としての主要項目ではありません。その部分のミスなら、学位には影響しないという考えもあります。但し、引用のマナーも知らない人間には、学位は与えられないといわれれば、それまでです。」

これは、早慶大学の判断次第です。但し、いったん取り下げても、今回の実験結果が正しいと再検証されれば、ノーベル賞候補も視野に入ります。昔、私がある大学の先生に、『PvsNP問題を解けば学位貰えますか?』と聞いたら、その先生は『そのレベルの成果なら、東大に持ち込んで学位をもらったらい』と答えてくれました。彼女の成果が本物なら、この手は使えるでしょう。日本の大学にこだわらなくてもよいでしょう。それから、実験に関しては、もう少し確認したいことと、彼女に話したいことがあるので、一度基礎研に行きたいのですが、御許可頂けますか?」

これに関しては、社長がすぐに決済してくれた。「解りました。直ぐに行ってください。なお、中野さん同行してください。古野常務は、中野さんを、企業倫理委員会の特別委員に、任命してください。監査役に準じる特別権限を与えると、指示書を発行してください。」

古野常務はにやりとして、一言かえした。「日露戦争の旅順に向かう、児玉参謀長ですか。スタッフが権限を持つのは好ましくありませんが、緊急時には臨機の処理を、お願いします。なお、私の携帯には、会議中であろうと、電話してもらって結構です。社長も同じですね。」

社長が同意した時、ノックの音が聞こえた。入出を許可すると、広報部の村井さんが、緊張した顔で入ってきた。彼女は一礼して報告した。

「社長、この度の小方論文事件に関して、基礎研究所の野上所長が、謝罪会見をされています。その文案を一度ご確認願います。」

文案を一読した、社長は怖い顔になった。「この文案には、『未熟な研究者』と言う表現が入っている。しかも、責任を彼女一人に追わせようとする魂胆が表れている。当社には、社員一人を悪者にして、逃げるような幹部は必要ではない。」

これを聞いて、村井さんは卒倒しそうになった。古野常務が口添えした。「プレス発表には、『私が企業倫理委員会の責任者として立ち会います。』と、野上所長に言ってください。なお、プレス発表には、論文作成方法には稚拙な面があった。しかし実験結果は、われわれは信じていると、言い切ってください。謝る線は、論文の不適切まで、研究結果は謝罪する必要はない。そこで防衛線をひきましよう。」

これで、会議は終了した。直ぐに古野常務は、指示書を発行してくれた。さらに、念のためと言って、業務用のゴールドカードを渡し、「キャッシングも可能なカードです。」とささやいてくれた。

### 3. 小方さんとの対話

私たち二人は、社有車の出迎えを受け、基礎研究所に入った。所長室での一通りの挨拶を受けたあと、直ぐに小方さんと私たち二人だけで、会議室にこもった。小方さんは、かなりやつれているようだった。簡単な自己紹介の後、田中氏が話し出した。

「小方さん、私は当社の関係者だが、科学哲学の学徒の一人として、貴女の立場を理解しているつもりです。貴方が発見した、『細胞の外的刺激による変化』は、『科学の革命』と言うにふさわしい出来事です。貴方はそれを自覚していましたか?」

小方さんは、力なく首を振った。田中氏は続けた。

「貴女が、科学革命を起こしているという、認識がなかったことが今回の悲劇の一因です。革命時には、色々の反革命的な動きが発生します。特に、科学的な見方と言っても、一様ではない、と言うことを知っていましたか。」

この質問にも、小方さんは首を横に振ったが、少し興味を引いたように感じた。

「つまり、ある概念が確定する前には、別のモノを見ようとするのです。今回の貴女の実験に関しては、『最初から、そのような作用を行う細胞が、紛れ込んでいた』などの、従来理論で説明しやすい根拠を、考えようとするのです。貴方にとっては、実験データが全てかも知れないが、反革命の立場では、実験実行時に混ざりものが入った、と解釈したら、従来理論に合うなら、そちらを選ぶ方が、心理的な負荷が少ないのです。」

小方さんは、これを聞いてはっとしたような目つきになった。

「さて、そのような反論に対して、どのように新発見者は対応したらよいでしょう？一つの考えは、反証可能性です。貴女は、反証可能性については、聞いたことがありますか？」

これに対しても、小方さんは小さな声で答えた。

「いいえ、聞いたことがありません。」

田中氏は、できるだけやわらかい雰囲気を保とうと、注意しながら話を続けた。

「科学的な議論は、反論をきちんと考えて、それが起こらないと言うことを示すことで、自分の結果を正しいという、このような姿勢が大切と言うことです。貴女の実験の場合には、一例を挙げれば『元から水素を生み出す特性のある細胞が、隠れていた』という可能性ですね。このような、反対意見を仮定し、それを潰すような実験を考える。これが大切なのです。このような観点で考えたことが、ありましたか？」

今回は、小方さんも少し体制を持ちなおした。

「ごめんなさい。考えていませんでした。」

田中さんは、少し姿勢を変えて踏み込んだ。

「ネイチャー・サイエンス誌の査読者は、その点を指摘して、『証拠不十分』や『実験結果が解りにくい』と表現したと思います。しかし貴女はそのように理解しなかった、そこが悲劇の始まりですね。」

これを聞いて、今まで溜まっていたものが、あふれ出したのであろう。小方さんは机に突っ伏して泣き出した。私はどうしようもなく、そっと彼女の背中を撫でてあげることしかできなかった。そして、泣き止んだ小方さんは、力なく言った。

「その通りです。解ってもらえるように、画像を強調しました。それが、今回の捏造と言う表現となりました。なお、文章コピーの件は、私の手控えの資料を、自分のパソコンに、つくっていたのです。これを論文にする時、引用元が不正確になりました。皆私が悪いのです。」

田中さんは、私の方を向いて説明するように話をした。

「彼女のように、新しいことを生み出す人は、自分用の資料を、適当な記述でまとめることが必要になります。昔なら、手書きノートや、コピーしたものを切り貼りするのですが、今は電子化しているので、Web情報の切り貼りで、ノートを作ることができます。そこで引用元の記述が甘くなるのですね。昔の時代なら、まず本をコピーするので、紙のコピーが残っているので引用文献もよく解ります。これは、時代の

問題もありますね。」

この話を聞いて、小方さんは救われたような顔つきになった。

「その通りです。でも論文の書き方で、引用元の大切さを認識していなかったのは、私が未熟だったからです。」

ここで田中さんは、私に向けてもう一つ説明してくれた。

「本来、大学の研究者育成では、先輩の研究に、少し変化をつける形で、論文作成をさせ、発表させるのです。このような訓練を繰り返したのち、ある程度形になれば、その後自由な研究をさせるのが、研究者育成の定型です。しかし、このような形で育成したら、先輩の後を追いかけるような研究しかできません。彼女のような独創的な研究は、できなくなります。特に小方さんは、実験の手腕が評価されていたようですね。指導教官もそれを買っていたので、あえて論文作成指導の時間を費やさなかったのでしょう。」

小方さんは、これについても同意した。

「そう言えば、私の指導教官は、実験ばかりさせてくれました。」

そこで田中さんは、一つ思い切ったことを言い出した。

「お手数ですが、一度あなたの実験状況を見せてください。特に、今回の細胞変形を引き起こす刺激の所です。」

これは、小方さんは意外だったらしい。しかし彼女は既に田中さんに対して、信頼感を抱いていて、素直に受け入れてくれた。

#### 4. 実験室での確認

実験室の利用に関しては、研究所の許可が必要だったが、私の指示には皆が従うように上から話が回っていたので、直ぐに対応してくれた。

実験室までは、小方さんが案内してくれた。その途中、田中さんは少し距離を置きながら、小方さんの歩き方を注意深く見ていた。そこで私も気が付いたが、小方さんも田中さんも、体の揺れが少なく、歩き方がきれいであった。

研究室に入る時、上に白衣をつけて、帽子をかぶった。田中さんは、この時少し首をひねっていた。

実験室では、田中さんの指示で、小方さんに、実験の要所の作業を、してもらうことになった。彼女は、ここが肝心と、細胞への薬剤注入の動作を見せてくれた。その時、田中さんの神経が張りつめているのが、私にもわかった。また、小方さんの背筋の伸びた姿勢と、必要時以外は微動もしない体に、ある種の圧迫感を感じた。

また、田中さんは、息を殺しほとんど気配を感じることができなかった。ただ、時々田中さんが私に対し、小方さんの手や腕の筋肉を見るように、指示してくれた。それを見ると、私にも、小方さんが、微妙にコントロールしていることが、何となく解ってきた。

実験が一区切りした後、田中さんが小方さんに質問した。

「若いときに、何か運動をしていましたか。それとも茶やお花を習っていましたか？」

小方さんは、なぜと言う顔をしながら答えた。

「母に子供の時から、お茶を習わされましたが、師範免状などは持っていません。」

田中さんは、微笑してつぶけた。

「あなたの体幹の筋肉は、しっかりしているようですね。姿勢がきちんと決まっています、微動もしない。これができない人も多いですね。」

小方さんも、苦笑して答えた。

「確かに、私が『今の若い人』と言うのも変ですが、同じ姿勢を保てない人も多いですね。」

田中さんは、この答えで、何か掴んだようだった。

## 5. 実験後の話

実験作業が、一区切りついたので、田中さんの指示で、3人は元の会議室に戻った。田中さんはまた私の方を向いて話し出した。

「中野さん、解りましたか。小方さんの凄い技を、見抜けましたか？」

私はどう答えてよいのか解らなかったので、首を横に振った。また小方さんも、少し不安げな表情で私たちを見ていた。そこで田中さんは、

「今回の小方さんの汚名を晴らすためには、第3者に追尾実験を成功してもらうことが一番です。このために、実験方法を公開し、世界中の研究者に追尾してもらうのが良い手段です。しかし、今回の彼女の操作を見て、薬剤投入や、その後の攪拌などに、微妙なコントロールを加えていましたね。さらに、彼女の体幹の筋肉は非常にしっかりしている。従って、実験中の姿勢は崩れない。このような実験条件を維持することが大切です。これが伝わらないと、おそらく追尾実験は難しいでしょう。小方さんもこれは、解っているでしょう。」

これは、小方さんも気が付いたようであった。

「そうです。他の人にやってもらっても、なかなかうまく行かないのです。それを、論文には書ききれなくて、困っています。」

私も、ここまで言われてやっと何を言いたいのか、解ってきた。

「確かに、匠の技ですね。これは、彼女だけしかできない。」

そこで田中さんは、私の方を向いてきつい一発を放った。

「貴女は、花咲電機の物作り力を、舐めている。いや、日本の物作り力を、舐めている。」

これで二人は、ますますわからなくなって田中さんを見た。

「つまり、当社の生産技術研究所の、作業分析のプロに観察させましょう。今までも、当社をはじめとする、日本企業は職人芸を、多くの人やロボットでできるように、技術化することを行ってきました。この力をもってすれば、どのようなコツがあるか、調べることはできるでしょう。そのために、研究室にカメラを持ち込みます。そして、複数の角度から小方さんの実験状況を撮影するのです。これと実験中の環境データを突き合わせれば、何か見えてくると思います。さらにこれを、ネット上で公開しましょう。これ以上悪く言われることはなし、公明正大にわれわれがやっていると言うことを、世界に発信するのです。」

これを聞いて、小方さんも明るくなった。私は、これを行うための社内手続きを考えると、少し重たいと持ったが、今の状況では、これは解決向けの良い手段だと思った。私たち二人が同意したのを見て、田中さんは次の指示を、小方さんに出した。

「あの実験室の、入退室管理と、クリーン化をしっかりとPRしないといけません。この

実験過程では、異物の混入は疑惑の一つです。反革命者の立場に立ち、反論を一つ一つ挙げて、潰していく。そのためには、実験中の服装なども、隙の無いようにしてください。帽子もきちんとして、髪の毛一つも見せないようにする。このような隙のない実験を見せることが大切です。特に使用した細胞のトレーサビリティは、きちんと管理してください。遺伝子レベルの検証を行うのも必要でしょう。このためには、第3者への委託も行うべきです。」

小方さんは、納得したようであった。田中さんは、もう一つ厳しい話を持ち出した。

「貴女が、実験の天才であることは、私たちもよく解っています。しかし、論文作成においては、まだ発展途上です。従って、今回は論文表現が不適切と言うことは、認めざるを得ないでしょう。また、貴女個人の問題であるので、こちらからは指示できませんが、博士論文に関しても、表現の不適切な部分があるので、取り下げと言う言い方は、仕方ないものともいます。」

小方さんは、目に涙を浮かべながら返事をした。

「実験の能力を認めていただき、ありがとうございます。研究者としての未熟さは、正直に認めます。その上で、論文は取り下げます。学位に関しても、取り下げを打診します。」

田中さんは、これに対して厳しく言い放った。

「貴女は、『論文作成の未熟』は認めるべきです。しかし、全人格に渡る『研究者としての未熟さ』は認めてはいけません。なお、学位に関しては、大学の判断を待ちますが、もう一度あなたの発見が、第3者検証ができれば、世論はひっくり返るでしょう。細胞の変化と言う『科学革命』なら、ノーベル賞候補も射程距離に入ります。その時、論文を提出したらよいでしょう。日本でなくても、アメリカの大学でも、かまわないでしょう。」

これを聞いて、小方さんは安心したような、微笑みを見せた。

## 6. なぜこのような攻撃が

そこで私は、もう一つの疑問を田中さんにつけてみた。

「なぜ日本の学界は、このような形式にこだわるのですか。マスメディアの揚げ足取りは、スキャンダルのごみ箱あさりと言うことで、何となく解るのですが？」

田中さんは苦笑して、説明してくれた。

「この話は、色々な面を含んでいます。一つは日本の教育に、まともな議論の教育ができていないと言うことですね。アメリカの作文教育は、小学生時代から、事実と意見の分離を教えます。そうして、議論の仕方を教えるのです。一方、日本では、事実と意見の分離の訓練を、司法修習生の段階で、訓練するのですね。このような状況だから、国会議論でも個人攻撃的なモノが多くなっていますね。この弊害が今回も出てきたのです。」

私も、少しわかってきた。

「確かに、小方さんへ的人格攻撃的な側面は、論文への反論ではなく、個人の信頼度を落とすことで、論文を否定しようとする動きですね。まるで一部の選挙での動きみたいですね。でも、学者さん達も論文の形式を議論している人が多いように思います。」

田中さんは、少し考えてから、重い口を開いた。

「この話には、二つの側面があります。一つ目の話は、このような実験結果に関しては、できないということを証拠づけるのは難しいのです。先ほどの話にもあるが、個人の名人芸が他の人間でできない。この場合は、他人の失敗が証拠にならないですね。このような意味では、反論するとき、形式的なミスを出すことは、十分あり得るのです。もう一つの話が、結構厄介な問題があります。学者の世界は、ある意味特権階級の世界なのです。その世界にいる者は、その世界の言葉で話さないといけません。そのルールを無視した人間は、追い出されるのです。今回の、論文書式の追求には、そのような一面もあります。もう一つ言えば、学者世界が研究費などをしっかり使えるのも、このようなルールで運営していることを、文部科学省などが認め、政府も認めているからです。」

これを聞いて、小方さんは、思いつめたような顔になった。そして、私に向かって話し出した。

「今のお話にもう少し付け加えましょう。学者の世界と言うのは、特別な世界なのです。論文の数で、地位が決まる世界です。そして、論文を書けない人間は、排除される世界なのです。この世界の住人は、ある条件を満たした者しか認められません。このコントロールの一部は、文部科学省が行っています。そして、学者たちと文部科学省の人たちは、自らの存在価値を、一般人に批判されることに、かなり神経質になっています。」

田中さんは、そこで介入してきた。

「小方さん、それ以上言う必要はありません。これ以上言うと、もう帰れなくなりますよ。貴女はまだ若いし、アメリカなど、まだ失敗に対する許容度が高いところで、研究者として認められる可能性はあります。そしてアメリカで認められれば、日本でも認められるのはよくあることです。」

小方さんは背筋を伸ばして、話し続けた。

「ありがとうございます。しかし、私はもう帰るところはこししかありません。会社の人間として、できる限りのことをさせてください。」

田中さんもこれに答えた。

「確かに、我々メーカーの人間は、失敗を認めて再チャレンジさせるは当たり前です。われわれの後ろにいる、経済産業省は、文部科学省ではありません。貴女の再チャレンジは十分あり得ます。」

小方さんは救われたような顔になった。

これで私たち二人は、基礎研を一旦退出することにした。途中、田中さんは、私に後始末を自分でやるように託して、帰ってしまった。

## 7. 本社での一幕

本社に帰って、社長に一切のことを報告した。実験状況を公開することに関しても、社長は不気味な笑いで、認めてくださった。そして、基礎研の野上所長、広報の村井さんと、古野常務、私も陪席して対策会議を行うことになった。冒頭、中西社長の怒号が響いた。

「今回の基礎研から上がってきた、報告はなんだ。『未熟な研究者の失敗』と書いている。

まず、今回の発見は、まだ間違いとは認められていない。論文表現上のミスを、追求されているだけである。ここで、『研究者の人格攻撃』を受け入れれば、全成果の否定につながってしまう。部下を守ることもできずに、トップの仕事が務まるか。」

これに対して、古野常務がやんわりと反論した。

「社長のおっしゃることはもっともです。しかし、今回の疑惑に関しては、実験ミスや捏造の可能性もないとは言えません。そのための検証はどうなっていますか？」

社長は私の方を見て、言い放った。

「そのため、私の代理として、中野君を基礎研に派遣した。中野君の報告を受け、私は正しいと考えている。中野さん、なぜ正しいと考えるか、皆に説明してください。」

私は、古野常務と社長の出来レースに、巻き込まれたと思ったが正直に答えた。

「私は、実験状況を見せてもらいました。彼女の実験操作は、まさに名人芸です。捏造などを行っているなら、実験途中での微妙な操作は行わない、と判断しました。確かに、発表や論文作成に幼さは見えますが、実験の技は本物と判断しました。」

社長は、この答えで満足そうであった。これを受け広報の村井さんが質問してきた。

「今回の研究は間違っていない、但し論文に不適切な表現があったので、撤回したいという発表は当方で行います。しかし、研究の正しさはどうアピールします。」

これに対して、社長が、私に答えろと、手で示された。

「この件に関しては、まず第3者の追従研究の成功が必要と考えます。第3者も成功すれば、間違いではないということになります。しかしながら、先ほども申したように、今回の実験は、小方さんの個人技に依存する面が多いです。従って、私は次の2手段を提案します。一つは、彼女の実験過程を、ビデオにとり、ネット上で公開するのです。その時、実験室環境データなどを、公開するのも必要と思います。もう一はその作業状況を、当社の生産技術の専門家に分析させ、キーになる動きを見つけ出すことです。これを公表することで、技の存在をPRすることができると思います。」

この報告に、社長と古野常務は大きく頷いてくれた。また広報の村井さんも、興味を持ったようだった。そこで野上所長が発言した。

「確かに、今回の現象を説明するためには、今の葉緑素変化の説明が一番まともです。反論している人の意見を聞くと、もっと変な細胞の存在を仮定しないといけません。故意のマジック的な注入でなければ、この仮説が一番受け入れやすいです。」

この発言に関しては、社長も少し機嫌が直った。その表情を見て、野上所長は少し反論した。

「社長、ただ今回の実験作業の公開では、そこまで見せてよいのですか。特に、当社の生産技術と匠の技の分析能力を示せば、中国などの企業にまねされないですか？」

この時の社長には、異様な凄味があった。

「それが狙いだ。中国企業などは、工学博士などの知識面のあるエリートは備えても、現場の技を軽視している。これは、現場の蓄積が備わっていない、新興国の一般的な弱点である。そこをPRする良い機会だ。新興国には、我々の生産技術の現状を見ても、追従する人材を育てるには、10年~20年の時間が必要になる。この差異を今回の事件を用いて、できるだけPRしたい。」

これで、他の人は社長の見識に敬服した。広報の村井さんが、補足質問をした。

「今回の研究室状況の撮影は、中野さんの指示で、広報と基礎研で行います。なお、小方さんは、あまり表に出さないことでよろしいですね。あの顔なので活用したい気もしますが・・・」

これに対しては、古野常務が釘を刺した。

「小方さんをこれ以上苦しめてはいけません。メディア対応は、広報および幹部と、必要ならタレントを雇いなさい。」

村井女史はもう一言言った。

「幹部と言うことなら、先ほどの社長は非常に魅力的でした。あれを使わないのは、もったいないように思います。」

これで彼女は虎の尾を踏んでしまった。

「そういうことをしたら、私がカリスマ的な経営者になってしまう。当社は、カリスマ依存ではなく、組織で動く会社だ。広報用に社長役が必要なら『白い犬』でも借りてきたらよい。」

これでこの会議は、お開きとなった。

プレス発表では、実験状況をビデオで公開することと、野上所長の他の仮説より有力と言う説明が、かなり力を持って行われたので、記者たちも割合素直に聞いてくれた。

## 8. 後日談

その後2か月ほどして、アメリカとイギリスの大学のチームが、それぞれ同じ方法での細胞実現に成功したとの報告があった。ネット上の世論も急変した。

また、早慶大学の学院論文騒動も、なぜか尻すぼみとなってしまった。

そのあと私は、社長からこのような裏話を囁かれた。

「この話は、総理官邸のさる方より、お話があって『若い人の失敗をカバーし、再チャレンジさせるように』との内意があった。皆よくその線で動いてくれたと思う。」

小方さんは、その後も元気に努めている。しかしなぜか私のことを慕って、何でも相談してくる。まるで妹ができたような感じだ。これを古野常務に相談したら、「娘ではないの」と言われてしまった。私はまだ若い気持ちでいたのに、失礼なことである。

この件の後、私は幹部の人たちと、話しやすくなった。虎の威を借りる狐にならないように注意したいと自戒している。

以上

注：本件はフィクションであり特定の人物・団体をモデルとしたものではございません

✎